

## 合歡の木之歌

——『閑吟集』小歌から——

## 植 木 朝 子

つばいなう 青裳 つばいなう つばや 寝もせいで 睡かる  
らう (二八)<sup>①</sup>

(可愛いなあ、合歡の木よ、本当に可愛い、可愛いねえ。  
寝もしないで、さぞ眠たかろうねえ。)

秀麗集』に引かれている。<sup>③</sup>

室町時代後期の流行歌謡・小歌を集成した『閑吟集』に見える一首である。「青裳」は合歡あむの木の異称。宋の蘇頌の『図経本草』では、崖豹古今注を引いて、「欲鑄人之忿、則贈以青裳、合歡也、植之庭除、使人不忿<sup>②</sup>」としており、合歡が青裳の異称であることを示すほか、人の怒りを除こうと思つたら青裳(合歡)を贈るのがよい、これを庭に植えておくと人の怒りを鎮めることができる。合歡が人の怒りを鎮めるといふ把握は古く『文選』「養生論」に見え、さらに、小歌の時代下つて明の李時珍の『本草綱目』にも見えて

いる。日本においても、たとえば弘仁九年(八一八)成立の『文華

正徳二年(一七二二)自序の『和漢三才図会』は、「合歡」の異称を並べて「合昏 夜合 青裳 萌葛 烏頼樹 尸利灑樹(仏経) 和名称布里乃木又云加宇加乃木」とした上で、『本草綱目』を引き「人家植於庭除間使人不忿蓋云合歡鑄忿萱草忘憂」とする。<sup>④</sup> 続けて、

合歡の木の皮の効能として、五臓を安らかにし、心を和らげて人を楽しくさせ、憂いをなくさせることを述べる。漢方薬としての効能も、植えておくだけで怒りを鎮めるとされる合歡の把握と重なっている。

さて、以上の例によつて、「青裳」が合歡の木の異称であることは確実と言い得るが、平安時代、鎌倉時代の辞書類には、合歡の木の異称としての青裳は見いだせない。

昌泰年間(八九八〜九〇一)に成つた『新撰字鏡』巻七には「合

合歓 柵夫利<sup>⑤</sup>とあり、延喜年間(九〇一〜九三三)成立の『本草和名』巻一三に見える合歓の異称は「合昏」、「戎」、「茸樹」「械」「菟藿」「百合」「罽忿」で、「和名柵布利乃岐」とする。また、承平年間(九三二〜九三八)に成立した『倭名類聚抄』巻二〇は「楮」「睡樹」の表記をあげ、「和名柵布里乃木」としている。さらに、鎌倉初期までに成立した『伊呂波字類抄』巻五は、「合歓木」に「ネフリノキ」の割注を付し、異称として、「睡樹」、「合楮」、「萱草」、「鹿葱」、「合昏」「百合」「罽忿」をあげる。<sup>⑧</sup>

こうしてみると、「閑吟集」の一首は、新たに知られるようになった異称としての「青裳」を取り上げたものと見られ、ここにも、流行歌謡としての新鮮味があったと考えられよう。

本稿では、合歓の木の歌を概観した上で、『閑吟集』小歌の面白さを考えてみたい。

### 一、和歌における合歓

合歓はマメ科の落葉高木で、高さは一〇メートル前後。葉は、長さ一センチメートルほどの小葉からなる複葉で、長さは三〇センチメートルほど。夜間は葉が垂れ下がり小葉は表面を合わせて閉じる。笑い話に分類される昔話の類型の中には、合歓の木の葉が閉じることに注目した次のような話がある。

愚かな婿(息子)が野良仕事からいつも早く帰って来てしまうので(あるいは帰りがあまりに遅すぎるので)、舅(親)は「合歓の木が眠ったら帰って来い」と教える。婿(息子)は、合歓の木のないところで仕事をするとわからないからと、合歓の木を切って腰に下げて行ったが、折った枝だったためにすぐしぼんでしまったのを、「眠ってしまった」と言って帰って来た。<sup>⑨</sup>

ここでは、合歓の木の葉が時間を知らせるものとして取り上げられているが、「ねぶ(り)のき」「ねむのき」の和名は、夜間に葉の閉じる性質から生じた。『名語記』巻四に、

問 木ノ名ニネフノ木如何 答 ネフハネフリノ木也 ヒルハ葉ノヒロコリテ日クレ夜ニナレハ葉ヲスヘタ、ミヨスル木也 晝夜ヲシリテネフハネフノ木トナツクル也<sup>⑩</sup>

とある通りである。また、中国で「合歓」(男女の共寝の意)とするのは、ぴったりと閉じ合わせた夜の葉の様子から出ているものである。六月〜七月、枝先に傘形の花が咲く。紅く細い雄蕊は花から糸状に伸び、外に向かって放射状に広がる。美しい花の姿や葉の変った性質、和漢の名称の面白さなどからすると、和歌にも多く詠まれそうに思われるが、古典和歌における用例は極めて少ない。以下、合歓の和歌を辿ってみたい。

『万葉集』には、次の三例が見える（原文も「合歎木」の字を用いている）。

① 昼は咲き夜は恋ひ寝る合歎木の花君のみ見めや戯奴さへに見よ（一四六一）

② 我妹子が形見の合歎木は花のみに咲きてけだしく実にならじかも（一四六三）

③ 我妹子を聞き都賀野辺のしなひ合歎木我は忍び得ず間なくし思へば（二七五二）

①は紀女郎が大伴家持に合歎の花とともに贈った歌で、「昼は咲き夜は恋いつつ寝るといふ合歎の花を主人だけが見るべきでしょうか。お仕える未熟者も見なさい」という意味で、自らを「君」（主君）に、家持を仕える者に見做して（「戯奴」は若輩に対し未熟者と揶揄して呼ぶ語）戯れたもの。家持に來訪を促し、暗に共寝に誘ったものと考えられる。なお、合歎の花は夕方開花し、中にはしほむので、実態にはそぐわない。「合歎木花」とあるものの、念頭に置かれているのは、昼間は開いていて夜になると閉じ合わされる合歎の葉の性質であろう。

②は、①に対する家持の返歌で、「あなたにいただいた合歎は花ばかり咲いて、おそらく実がならないのではないでしょうかと切り返す。あなたの誘いはうわべだけのことで実がない、あるいは、

一時的な愛情であって持続しないだろうといった意味を込めたものである。合歎は二度花を咲かせるが、その割に実が少ないことを踏まえた、実感的な歌と考えられよう。高知県宿毛市仲市の田植歌に春咲くはうつけ卯の花 五月に咲くは かたじろ かたじろは 一度こそ咲け こうかの花は二度咲く 二度咲いて一度実がなる 一度はただの仇花

と見える。「こうか」は、「合歎」を音読したところからの名称で、先に引いた『和漢三才図会』に「加宇加乃木」とあった。後述するように、『古今和歌六帖』に見えるのが古い用例である。

①②より、合歎が男女の共寝のイメージをはらんで相聞歌に用いられていることが確認できる。

③は、寄物陳思歌で「あの娘のことを聞き継ぐ都賀野辺のしなだれ合歎木。わたしは忍びかねる、絶え間なく思うので」といった意味。地名「都賀野」に、恋人のことを聞き継ぎたい（続けて聞きたい）の意味を掛けた、木に寄せる恋歌である。「しなひ合歎木」は、葉の垂れ下がる様子から言ったものと思われるが、これについては、恋の思いに沈む自分が打ち萎れているさまを譬えたとする説<sup>14</sup>、なやかな女体のイメージを重ねるとする説<sup>15</sup>がある。イメージの重なりを全く排除する必要はないが、「しなふ」「しのぶ」が音の上でつながることを考えると、「しなひ合歎木」は、どちらかといえば

「忍び得」ぬ「我」の方の譬えと見るのが自然であろう。

『万葉集』①②の歌は、『古今和歌六帖』（九八〇年頃）第六「かふくわの木」に、

ひるはさきよるはこひぬるかふくわの木きみのみみむやわけさへにみよ<sup>⑩</sup>

わぎもこがかたみのかふくわはなにのみさきてけだしもみにならぬかも

として見える。『万葉集』の表記「合歡」が「かふくわ（ん）」と音読されたものである。なお、『和歌童蒙抄』（一二二七年頃）や『袖中抄』（一一八六年頃）は①の歌第三句を「ねぶりの木」として引いている。

『古今和歌六帖』を踏襲した『新撰和歌六帖』（一二四四年頃）第六帖「かふくわ」には、

おくやまのかふくわの花もあはれなりまたもむすばぬ身のためしとて（家良）

うかりけるかふくわの花のためしかなわがおもふこともならぬ身なれば（為家）

わぎも子にかくとばかりはつげやらんかたみのかふくわはなさきにけり（知家）

世世にたえぬおほうち山のかたなしにふるさかふくわの木ずゑ

をぞみる（信実）

山ふかみいつよりねぶと名をかへてかふくわのきには人まどふらん（光俊）

の五首が見える。家良詠・為家詠は前掲『万葉集』②の歌を引いて、合歡の実がならないことと、思うようにならないわが身を重ねている。知家詠も『万葉集』②の「我妹子」「形見」の語を用いて一首を構成している。信実歌は万葉歌から全く離れた詠みぶり、荒廢した風景の中の古い合歡の木を歌い、寂寞たる趣が漂う。興味深いのは光俊詠で、「かふくわ」は「ねぶ」の古称であるという把握が明確に表れている。『新撰和歌六帖』の例からは、『万葉集』紀女郎詠に見られたような、男女共寝のイメージ、華やかな恋の情趣は看取されず、「あはれ」「憂し」「かたなし」といった哀感漂うものになつている。また、「おくやま」「山ふかみ」の語からは、山奥の物寂しい雰囲気を感じられる。「わぎも子」を歌う知家詠も、形見の花が咲いたことだけは告げやりたいという歌い方からすると、恋人との親密な関係は途絶えており、終わつた恋を悲しむ歌と解されるのである。

この後、合歡はほとんど詠まれることがなく、「白河殿七百首」（一二六五年）に、

ひるさきてまがきにたてるねぶの木はくるるよりこそ名にもし

るけれ(具氏)

と見え、『天木和歌抄』に、「ねぶの木」として為家(一一九八〜一二七五)の一首、

あきといへば長き夜あかすねぶの木もねられぬ程にすめる月かな

が見える程度である。具氏の「ひるさきて」は『万葉集』①と共通するが、一首の中心は、日が暮れると眠るという性質とねぶの木の名を取り合わせて興じるところにある。為家詠も「ねぶの木」に対して「寝られぬ」という反対の語を出した言葉遊びの歌である。

次に見える合歎の用例は、正徹(一二三八〜一四五九)の『草根集』まで下る。

軒ちかく老いのねぶりをうつす木も身のうきことを夢にやはみん

日くるればおのが葉ごとに歎を合せてねぶの木もうらやまし

一首目は、「庭合歎」の題で詠まれたもので、和歌の中では、合歎は「ねぶりをうつす木」と表現されている。二首目は「合歎木」

の題で詠まれたもの。一首目と同様、葉を閉じ合わせて眠るという性質に焦点を当てているが、第三句第四句「歎を合せて」は、「合歎」の漢字表記を意識したものである。知的な遊びの要素が強いが、「うらやまし」く思われるものとして、男女の仲睦まじい共寝のさ

まも連想されているよう。

連歌の寄合書『連珠合璧集』には、

がうかトアラバ、合歎木也。ねぶの木と同也。かたみ 大内

山 身ならぬ<sup>17)</sup>

とある。「かたみ」「身(実)ならぬ」は『万葉集』の家持歌を、「大内山」は『新撰和歌六帖』信実歌を念頭に置いた寄合語であろう。

さて、江戸時代に入ると、後述するように、合歎は俳諧において多く取り上げられてゆくが、相変わらず和歌には詠まれず、以下の数例が見出される程度である。

ねぶの葉のしるしとするもあはぬまに山のかげ野はひぐらしの

声(『漫吟集』)

恋恋ひてあふうれしさにねぶの木のねぶたしとしも星はおもは

じ(『六帖詠草』)

六月十日あまり、すずみせんとてすみだ河にふねをうかべ

てあや瀬へさかのほれば、がふくわ咲きたり

ほのみゆるうすくれなるのひとむらあやせの岸のねむの花か

も(『うけらが花初編』)

なつの日のながささかりのねむの花夢かとはかり匂ふいろかな

(『浦のしほ貝』)

合歡は、主に、名前の由来ともなった夜に閉じられる葉に関心が寄せられ、わずかに花を詠む場合は、『万葉集』以来、実がならぬことを導くのが型となっていたが、加藤千蔭（一七三五～一八〇八）、熊谷直好（一七八二～一八六二）に至ってはじめて、「うすくれなる」夢かとはかり匂ふいろ」と、合歡の花の色に注目した歌が詠まれている。契沖（一六四〇～一七〇二）詠は「あふ」の語を詠み込み、「合歡」の用字を意識しているものと思われる。小沢蘆庵（一七二三～一八〇二）の和歌は、一連の七夕歌の中の一首で、「ねぶたし」の「ねぶ」を導き出すとともに、男女の共寝の意の「合歡」を響かせた「あふ」恋の歌になっている。

## 二、俳諧における合歡

先にふれたように、俳諧においては、合歡は相当数の用例がある。俳諧としては比較的早い例に『塵塚俳諧集』（一六三三）の、「ねぶの木の花もねぶれる夕かな」<sup>⑮</sup>があるが、合歡が俳諧に多く取り上げられるようになるのは、芭蕉（一六四四～一六九四）の次の句の影響が大きい。

象潟や雨に西施がねぶの花（『おくのほそ道』<sup>⑯</sup>）

象潟は、今の秋田県の最南端、象潟町の海岸で、かつては入江に島が点在する景勝地であった。その眺めの美しさを雨に濡れた合歡

の花に譬え、また、西施が物思わしげに眼をつぶっているさまに譬えた。すなわち合歡を「西施がねぶる」に言いかけたのである。西施は中国春秋時代、越の美女であるが、越王・勾践により、呉王・夫差に献じられた。『蒙求』には、西施が胸を病み、眉をひそめていたことが記されるが、病弱の身で心ならずも呉王に仕える西施の憂いを象潟の印象に重ねている。その発想の源は、西湖を西施に擬した蘇東坡の詩にある。『おくのほそ道』本文では「松島はわらふがごとく、象潟はうらむがごとし。さびしさにかなしびをくはへて、地勢魂をなやますに似たり」として、象潟の風景の物寂しさを強調している。このように一句は中国の故事や漢詩を引いた複雑な構成になっているが、雨に濡れた合歡の花の物憂げな様子が印象的に捉えられていよう。この句により、合歡の花は象潟の名物ともされるようになった<sup>⑰</sup>。

芭蕉の合歡の句には、他に「合歡の木の葉ごしもいとへ星のかげ」<sup>⑱</sup>もある。七夕と合歡を取り合わせたもので、年に一度の「合歡」（共寝）の意を響かせている。

以下、蕪村（一七一六～一七八三）と一茶（一七六三～一八二七）の句から一例を掲出する。

虎雄子が世を早うせしをいたむ

雨の日やまだきにくれて合歡の花（蕪村『とら雄遺稿』<sup>⑲</sup>）

虎雄の早逝をいたむ句で、早々と葉を閉じた雨の日の合歎を虎雄の早逝に譬える。比喩ではあるが、雨と合歎の取り合わせは芭蕉の句を意識しているよう。

心憎き合歎の下陰網入れん（蕪村『落日庵句集』）

川辺の合歎が木陰をつくっている場所に網を投げ入れようという句であるが、「心憎き」は「合歎」（共寝）の意を背景に置いた表現で、魚もその木蔭で添い寝をしているかもしれないと想像をめぐらしたのである。後には、より卑俗な趣が強くなった例として、鳳朗（一七六二〜一八四五）の「合歎の陰帯仕直しにかかりけり」（『鳳朗発句集』）もある。

蝮うばみの軒も合歎の葉陰哉（『蕪村句集』）

蛇と合歎を取り合わせた一句。「ねむ」から「眠り」を連想し、軒と結びつけた。蝮を大酒飲みおほいのみの譬えとし、酔っ払って寝ている様子とする説<sup>23</sup>、恐ろしい大蛇と優美な合歎は「野猪に菘」といったような雅俗の配合であるとする説<sup>24</sup>などがあるが、鳳朗の句などを参考にすると、前者の解のように、合歎の葉陰に寝ているのは恋人同士ならぬ、大酒飲みだという滑稽味を出したものか。なお、下郷蝶羅（一七三三〜一七七六）に「松のわらひ 合歎のいひき」と題された奥羽紀行がある。先に引いた『おくのほそ道』の「松島はわらふがごとく、象潟はうらむがごとし」、および「象潟や雨に西施がね

ぶの花」が書名の由来であるが、『おくのほそ道』にはない「いびき」の語を出している。

合歎の葉の落ちて仕廻へば夜長哉（蕪村『落日庵句集』）

合歎は根にかへりいそぎの夜長哉（蕪村『落日庵句集』）

合歎は夏の季語であるが、葉が落ちることを取り上げ、秋（夜長）の句に詠み込んでいる。合歎はその名によって、「寝る」ことを導いている。特に二句目の「根」には「寝」が掛けられている。日々ひびに四五本ちるや合歎の花（一茶『享和句帖』）

古舟もそよそよ合歎のもやう哉（一茶『七番日記』）

合歎の露浴びねばならぬ支度哉（一茶『七番日記』）

長の日やピンヅルどのと合歎の花（一茶『七番日記』）

寝ぐらしやねぶちよ念仏合歎の花（一茶『八番日記』）

合歎さくや七ツ下がりの茶菓子売り（一茶『文政句帖』）

一茶の句にも、これまでの例のように、「寝る」「露（雨）」と共に詠まれるのが見られるが、「日々ひびに四五本ちる」「古舟もそよそよ」「長の日」「寝ぐらし」など静かにゆっくりと流れる時間のけだるさを感じさせるようなものが多い。最後の一句は七ツ下がり（夕方四時頃）に開花する合歎の花の性質をよく捉えている。

以上のように、俳諧における合歎は、和歌でも見られた「眠る」「寝る」を導いたり、男女の共寝を連想させたりする素材としてだ

けでなく、物憂さやけだるさを含んだ風雅な素材として捉えられる場合があった。

## 三、『閑吟集』の合歓

冒頭に引いた『閑吟集』二八一番歌を改めて掲出する。

つばいなう 青裳 つばいなう つばや 寝もせい で 睡かる  
らう

当該小歌については、閨の内て男が女をいたわりささやきかける言葉と解するものが多いが（大成、全集、集成、新大系別解、新全集）<sup>30</sup>、合歓を女の譬えではなく、植物そのものとして捉える説もある（大系、新大系）<sup>31</sup>。新大系は、「本来は、合歓の木の枝葉を見ながら、あるいは指で撫でながら口ずさむ唱え言。「ねんねねぶの木朝はよ起きよ、晩の日暮にやちゃつと眠れ」（和歌山県・子守歌）。ただし二八二との連鎖からは、暗に女を愛撫する男のささやきともとれる。」と指摘している。二八二は、当該小歌の直後に置かれた次の一首。

あまり見たさに そと隠れて走て来た 先放さいなう 放して  
物を言はさいなう そぞろいとほしうて 何とせうぞなう

童歌には動物や植物に呼びかけるものがあり、一つの類型をなしているが、植物として取り上げられるのは、土筆、茅萱、あざみ、

れんげ、たんぼぼ、おおほこ、あけび、ほおずきなどで、動物に呼びかける歌ほど多くはない。管見に入った合歓の童歌としては、次のようなものがある。

ねんねねむの木 朝はよ起きよよ 七つ下がれば みな眠れよ  
ねんねしなされ ころりとさんせよ 朝はよから 起きなされよ  
（和歌山県日高郡印南町印南）<sup>32</sup>

ねんねんねむの葉つば ねるだろし 坊やもねむの葉つばよ  
くねろよ  
（長野県下高井郡野沢温泉村）<sup>33</sup>

後者は、「坊や」を寝させるきっかけとして合歓が引き合いに出されているに過ぎず、合歓への直接の呼びかけとは言いにくいが、あわせて掲出した。こうした童歌においては、あることをせよ、と命じる（ここでは、「朝は早く起きろ」、「夜は早くよく寝ろ」）のが通例であるのに対し、『閑吟集』小歌は、合歓という植物そのものに歌いかけたとすると、「寝もしないでさぞ眠たかろうね」と、自然には考えにくいことを想定した上でそれをいたわるといふ屈折した表現になる。前代の歌謡ではあるが、『梁塵秘抄』には、「春の野に小屋構いたるようにて突い立てる鉤蕨 忍びて立てれ下衆に取らるな（四五二）」「垣越しに見れども飽かぬ撫子を 根ながら葉ながら風の吹きもこせかし（四五二）<sup>34</sup>」のような例があり、早蕨や撫子を可憐な少女の隠喩としている。「隆達節歌謡」には、女の比喩であ



ることが詞章に示された形ではあるが、「十七八は砂山の躑躅 ねいらうとすれば 揺り揺り起こさるる」の一首が見える。「寝入ろう」「根入ろう」の掛詞が謎解きの鍵になっているが、山躑躅は早春に咲き、枯れた草木の中でひときわ華やかに目立つ。「春を告げる花」とされる場合もある（駒木敏先生御教示）ことを考えると、

若くかつ華やかな女の譬えとしてふさわしい。さらに、根が入らないことを導くための「砂山」ではあるが、背景の「砂」に対して、色鮮やかな躑躅は、譬えられる女の美しさを一層引き立たせているようにも思われる。こうした諸例から、当該小歌の合歎も、童歌の流れを汲んだものというよりは、性的な魅力を含んだ女の譬えと見てよいものと思われる。「合歎」自体に男女の情交の意味があるため、諸注、暗黙の了解のうちに、合歎を女の比喩として捉えているようであるが、小野恭靖は、次のように踏み込んでいる。

逢瀬の場において男の立場から愛する女に向かって言うことはをもとにした歌である。小さくて可愛いという意味を持つ「つばい」を三度も畳み掛けて、共寝をする女へ愛を囁く男の姿が彷彿とする。ところで、この「つばい」という語には、すばんで細いという意味もある。これを踏まえれば、ここに歌われる女性の可愛らしさの根源は、その肉体に由来すると言える。また、女性が喩えられる「青裳」すなわち、合歎の木はその用字

からもわかるように、男女の性愛を暗示している。こうしてみると、この歌は恋人である女性への賛美を眼目にしたきわめて性愛色の強い歌であると言えるのである。<sup>⑤</sup>  
さらに小野論は、注に秦恒平の見解を引いて次のように述べている。

秦恒平『閑吟集 孤心と恋愛の歌話』一九三頁には、「つばいは壺、茗、局などを連想させますね。しかも、いずれも女に縁がある。桐壺、藤壺といえは後宮の一面をさす呼名であって、しかもその女主人の呼名でした。花の茗といへば処女の譬えですし、お局さまといひ、転じて美人局などと書くのも、性的対象としての女人と無縁でないどころか、それそのものを指しています。壺は容れものです。女は銘々に小さな壺を身の秘処に抱いている。平常はつぼんでいるものへ、時に物を受容れて用を足す」とある。秦は「つばい」という言葉を発する主体を女性と考えており、筆者とは見解を異にするが、この引用部分には賛意を表したい。

確かに、『日葡辞書』が「Tuboi. ツボイ（窄い）容器などのように、ややつぼんで、口が一段と狭く締まっているもの」とするように、「つばい」は、細く狭まっているさまをも表す。しかし秦論の言うような壺の暗示は、女の肢体が合歎の木に譬えられることと

はうまく対応しないように思われる。諸注、指摘するように、「閑吟集」には、「つばい」がもう一例ある。

赤きは酒の咎ぞ 鬼とな思しそよ 恐れ給はで 我に相馴れ給

はば 興がる友と思すべし 我もそなたの御姿 うち見には

うち見には 恐ろしげなれど 馴れてつばいは山臥（一九〇）

一九〇番歌は、謡曲「大江山」の一節で、酒吞童子が山伏たち（実は源頼光の一行）をもてなす時の言葉である。ここでは山伏に対して「つばい」と言っており、秦論の言う「壺」は意識されていない。

当該小歌の「つばい」に可愛らしいの意味だけでなく、細くすぼんでいる意味を重ねるとしたら（必ずしも重ねなくてもよいが）、それは、合歡が葉を閉じて垂れ下がる様子を言うのではないだろうか。合歡の木を女に譬える場合には、必ずしも「つばい」（細くすぼんでいる）の語に依拠する必要はなく、合歡の木そのものの姿によると考えれば十分ではないか。『万葉集』に「しなひ合歡木」とあったように、しだれる樹形はしなやかな女の肢体を連想させる。

たとえば、慶長初年（一五九六）に成立した『美楊君歌集』は、伏見の里の遊女・小柳を歌った十九首からなる小歌集であるが、しだれる柳を繰り返し歌う。

柳に掛かる藤の花 しだれた振りは柳よの

しだれ小柳の振りこそ好けれ 桜も今は何にかはせむ

柳の糸の枝たれて 春風に誘はれて あはれ我にも お靡きあ  
れ<sup>㊦</sup>

遊女の名からして柳が取り上げられるのは当然のことではあるが、たおやかな柳は官能的な女の姿をよくうつしていると言えよう。藤の花もともに歌われていることがあるが、垂れ下がる花房のなよやかさは柳と共通する<sup>㊦</sup>。

柳とも共通する、しなやかな枝を持つ合歡であるが、ほのかに紅く、細い蕊が放射状に広がる花は、後代の俳諧に詠まれるように、どこか気だるく物憂い趣をもち、しなう枝とともに、性愛の果ての女の疲れを巧みに表現していよう。先にあげた『梁塵秘抄』の早蕨や撫子が、他の男のものになりはしないかとやきもきさせ、垣越しに見るだけの存在である少女、可憐な処女を譬えるのにふさわしい草であったように、合歡の木は、柔らかに男に身を任せる、なよやかな美女を譬えるのにふさわしい木なのである。

具体的な合歡の姿がどのような女の比喩になるのかということを考えてきたが、当該小歌において、「青裳」という異称で示されているのはなぜだろうか。「寝もせいで」「睡かるらう」を導くためには、和歌や俳諧に見られたように「つばいなう 合歡の木」あるいは「つばいなう 合歡よ<sup>㊦</sup>」とでも歌った方が、音のつながりがスム

ーズなようにも思われるのに、「青裳」を使っていることには、何らかの意図がこめられているのではないか。先に、「青裳」が、比較的新しく知られるようになったらしい異称であることを述べ、あえてそれを用いるところに小歌の新鮮さがあったのではないかと指摘したが、『閑吟集』の注釈史において「青裳」使用の意図にまず触れたのは、北川忠彦（集成）の「末摘花」の紅と青裳の対照、また「馴れてつばいは、山伏」（一九〇参照）といった成句をもふまえつつ前歌に続けたか。」という指摘であった。前歌は、

この歌のごとくに 人がましくも言ひ立つる 人はなかなか我  
がためは 愛宕の山臥よ 知らぬ事な宣ひそ 何事も 言はじ  
や聞かじ白雪の 言はじや聞かじ白雪の 道行ぶりの薄氷 白  
妙の袖なれや 楳が原も降る雪の 花をいざや摘まうよ 末摘  
花は是かや 春も又来なば都には 野辺の若菜を摘むべしや  
野辺の若菜を摘むべしや

であり、謡曲「楳天狗」（廢曲）の一節である。北川説を引いて、真鍋昌弘（新大系）も、「前歌の白や紅に、青の語も加えて、豊かな色彩の展開」としている。これらはしかし、当然ながら『閑吟集』に配列された時の「青」の働きであり、独立した小歌として見た時の「青」の意味、意図ではない。

「青」は、若い、未熟だ、という意味で使われることがある。た

たとえば、『古事談』巻三—一〇四には、ある僧の言葉として、「或る所の青女房を相ひ語らひて、洗濯など誂へ侍るが、慮はざるに懷妊の事候<sup>④</sup>」とあり、年若い妻のことをやや謙遜して「青女房」と言っている。また、謡曲「葵上」には、「不思議やな誰とも知らぬ上藨の、破れ車に召されたるに、青女房とおぼしき人の、牛もなき車の長柄に取り付き、さめざめと泣き給ふいたはしよ<sup>⑤</sup>。」と見え、六条御息所に仕える年若い侍女が「青女房」とされている。「青裳」の「青」をこのような例と重ね合わせてみると、若くまだもの馴れぬ女をいとおしむ気持ちの表れとも解せるのではなからうか。

また、「裳」は、下半身に着けるもので、男女とも着用したが、平安時代、成人貴族女性の正装で、端を長く垂らして着用するものが印象的である。やわらかく長く引く裳の形状は、合歡のしだれる樹形をより強調する表現と思われる。

以上、見てきたように、『閑吟集』小歌は、『万葉集』以来、男女の共寝のイメージを持つ合歡の木を、言語遊戯として、あるいは抽象的な恋模様<sup>⑥</sup>の比喩として用いるのではなく、なよやかな女体の肉感的な比喩として取り上げ、一首の中心に据えた。さらに比較的新しく知られるようになった「青裳」の異称を用いることで新鮮味を付加し、「青」によって女の年若さ初々しさを、「裳」によってやわらかくしなう肢体を強調していると言えよう。

## 注

- ① 真鍋昌弘校注、新日本古典文学大系『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』(岩波書店、一九九三年)により、一部表記を改めた。『閑吟集』の引用については、以下同じ。
- ② 『大漢和辞典』第二二卷(大修館書店、一九五九年)「青裳」の項所引。
- ③ 『文華秀麗集』巻中「艶情」所収、菅原清公「奉和春閨怨」に「合歡寂院寧鐫窓。萱草閑堂反召悲」とある(小島憲之校注、日本古典文学大系『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹』岩波書店、一九六四年)による。
- ④ 『和漢三才図会 下』(東京美術、一九七〇年)による。(〜)内は割注。
- ⑤ 京都大学文学部国語学国文学研究室編『新撰字鏡(増訂版)』(臨川書店、一九六七年)による。天治本、享和本、群書類従本とも同じ。
- ⑥ 覆刻日本古典文学全集『本草和名』(現代思潮社、一九七八年)による。
- ⑦ 京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成 倭名類聚抄(本文篇)』(臨川書店、一九六八年)による。引用は元和古活字本。
- ⑧ 『伊呂波字類抄』(風間書房、一九六五年)による。『色葉字類抄』黒川本は「ネフリノキ」の読みを示し、異称としては「睡樹」「台榭」のみをあげる(中田祝夫、峯岸明『色葉字類抄 研究並びに索引』(風間書房、一九六四年)による)。
- ⑨ 『日本昔話通観』(同朋舎出版、一九七七年〜一九九八年)によれば、愛媛県、長崎県で採集されている。合歡の木が取り上げられる昔話でより広く全国的な分布の見られるのは、餅争い(餅つき型)の動物昔話である。典型的な話は次のようなものである。

- 兎とひき蛙が山上で餅を搗き、兎が「臼」を谷へ落として下で食べよう」と言う。兎は素早く谷に降りるが、臼の中には餅がない。餅は途中で臼から飛び出し、合歡の木にひっかかっていたのであった。のろのろと谷へ向かっていたひき蛙はそれを見つけてみな食べてしまう。戻ってきた兎はそれを聞き、悔しがって合歡の木の間をかじった。そのときからひき蛙の腹はふくれ、兎は合歡の木の根をかじるようになった。
- これは、兎が合歡の木の根をかじる習性のいわれ話になっているが、かちから山の昔話において、兎が合歡の木で舟を作り、狸が泥舟を作るといった形で、兎と合歡の木が取り合わせられる場合もある(鹿兒島県)。
- ⑩ 『名語記』(勉誠社、一九八三年)による。
- ⑪ 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳、新編日本古典文学全集『萬葉集②』(小学館、一九九五年)による。
- ⑫ 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳、新編日本古典文学全集『萬葉集③』(小学館、一九九五年)による。
- ⑬ 『日本民謡大観(四国篇)』(日本放送出版協会、一九七三年)による。「春咲く花はうつけ卯の花」の部分だけは鹿持雅澄(二七九〜一八五八)編の『巷謡編』に見えるので、少なくとも江戸後期までさかのぼる。合歡の木について歌った後半は、いつまでさかのぼるか、未詳。
- ⑭ 注⑫書による。
- ⑮ 平田喜信、身崎壽『和歌植物表現辞典』(東京堂出版、一九九四年)による。
- ⑯ 以下、和歌の用例引用は『新編国歌大観』により、一部表記を改めた。
- ⑰ 木藤才藏、重松裕己校注、中世の文学『連歌論集 一』(三弥井書店、一九七二年)による。
- ⑱ 中村俊定、森本昭校注、古典俳文学大系『貞門俳諧集 一』(集英社、一九七〇年)による。
- ⑲ 井本農一、久富哲雄、村松友次、堀切実校注・訳、新編日本古典文学

全集『松尾芭蕉集②』（小学館、一九九七年）による。『おくのほそ道』の引用は、以下同じ。

⑳ たとはば、一茶の連句に次のような例がある。

題盆画象濁

涼しさの浪こもとに盆画哉

既醉

畳にかほる合歡の上風

一茶（寛政年中）

雨が降るとて栗餅を掲ぐ

阜島

象濁の合歡に発句をぶらさげる

一茶（文化一〇年二月）

⑳ 井本農一、堀信夫校注・訳、新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集①』（小学館、一九九五年）による。

㉑ 尾形仿、森田蘭校注『蕪村全集 第一巻』（講談社、一九九二年）による。蕪村の句の引用は、以下同じ。

㉒ 宮田正信、鈴木勝忠校注 古典俳文学大系『化政天保俳諧集』（集英社、一九七一年）による。

㉓ 注㉒書による。

㉔ 清水孝之校注、新潮日本古典集成『與謝蕪村集』（新潮社、一九七九年）による。

㉕ 宮脇昌三、矢羽勝幸校注『一茶全集 第二巻』（信濃毎日新聞社、一九七七年）による。

㉖ 宮脇昌三、矢羽勝幸校注『一茶全集 第三巻』（信濃毎日新聞社、一九七六年）による。『七番日記』の引用は、以下同じ。

㉗ 宮脇昌三、矢羽勝幸校注『一茶全集 第四巻』（信濃毎日新聞社、一九七七年）による。

㉘ 注㉗書による。

㉙ 各注釈書の略号は、以下の通り。

合歡の木之歌

大成Ⅱ浅野建二『閑吟集研究大成』明治書院、一九六八年

全集Ⅱ白田甚五郎校注・訳、日本古典文学全集『神楽歌 催馬楽 梁

塵秘抄 閑吟集』小学館、一九七六年

集成Ⅱ北川忠彦校注、新潮日本古典集成『閑吟集 宗安小歌集』新潮

社、一九八二年

新大系Ⅱ真鍋昌弘校注、新日本古典文学大系『梁塵秘抄 閑吟集 狂

言歌謡』岩波書店、一九九三年

新全集Ⅱ徳江元正校注・訳、新編日本古典文学全集『神楽歌 催馬楽

梁塵秘抄 閑吟集』小学館、二〇〇〇年

㉚ 大系（志田延義校注、日本古典文学大系『中世近世歌謡集』岩波書店、一九五九年）は、頭注に、「せいしやうは、合歡則ねむの木の異称「青

裳」か。仮名遣いは「せいせう」で一致しないが、あるいは、幼い時、少時を意味する「生小」か。「宮に初めて参りたる比」（枕草子参照）の

清少納言を語って「清少」としたか。」と記すのみである。一つの解として「青裳」を示し、比喩にはふれない。

㉛ 日本わらべ歌全集『和歌山のわらべ歌』（柳原書店、一九九一年）による。

㉜ 日本わらべ歌全集『長野岐阜のわらべ歌』（柳原書店、一九八一年）による。

㉝ 注㉜新全集による。『梁塵秘抄』は新聞進一校注・訳。

㉞ 小野恭靖編『隆達節歌謡』全歌集 本文と総索引（笠間書院、一九八八年）により、一部表記を改めた。

㉟ 小野恭靖『閑吟集』に描かれた愛と性（『国文学 解釈と鑑賞』第七〇巻第三号、二〇〇五年三月）。

㊱ 『邦訳 日葡辞書』（岩波書店、一九八〇年）による。

㊲ 小野恭靖『美楊君小歌集』考察（『韻文学と芸能の往還』和泉書

院、二〇〇七年)による。

③9 柳と藤の絡み合いを歌うものに、古く『梁塵秘抄』今様があり、男女抱擁のさまが投影されていると考えられる(植木朝子「下がり藤」小考——『梁塵秘抄』古柳から——)『日本歌謡研究大系 上巻 歌謡とは何か』和泉書院、二〇〇三年)。今様においては男女それぞれが(女だけではなく)、しだれる植物にたとえられているが、それが性愛の表現とつながっている点は、合歓の小歌とも共通する。

④0 川端善明、荒木浩校注、新日本古典文学大系『古事談・続古事談』(岩波書店、二〇〇五年)による。

④1 小山弘志、佐藤健一郎校注・訳、新編日本古典文学全集『謡曲集 ②』(小学館、一九九八年)による。

\* 「合歓」については、注⑩書の他、小島憲之「ねむの花——万葉集の戯歌をめぐる——」(『人文研究』第一四巻第四号、一九六三年五月)、細見末雄『古典の植物を探る』八坂書房、一九九二年、東聖子「合歓」(『国文学』第四七巻第三号、二〇〇二年二月)などを参照した。